

6 みなさんに伝えたいこと

○伝えようとする意欲が大切

ポルトガル語は6カ国語には入っておらず、東京で会話集と日 - ポ辞書をやっと手に入れた。

ボン ディア

Bom dia おはよう

ボア タールデ

Boa tarde こんにちは

ボア ノイチ

Boa noite こんにちは おやすみなさい

アテ ロゴ

Até logo さようなら

オブリガード

Obrigado ありがとう (男性)

オブリガダ

Obrigada ありがとう (女性)

デスクルピ

Desculpe ごめんなさい

クワント エ

Quanto é いくらですか?

ボル ファヴォール デスコント

Por favor desconto 安くしてください

ボル ファヴォール ブリンデ

Por favor brinde おまけしてください

ムイト ボニータ

muito bonita かわいいね

[数字] ウン ドイス トレイス クアトロ シンコ セイス

Um 1, Dois 2, Tres 3, Quatro 4, Cinco 5, Seis

6, Sete 7, Oito 8, Nove 9, Dez 10, Cen 100, Mil 1000

等...、生活のために必死で覚えた。ポルトガル語の百は

「Cen」だが、「セン」という音は日本語の「千」を表す

ので、日本人の間では注意が必要だった。

レストランでは料理のサンプルや写真はなく、文字だけのメニューだった。

FIRE CHATERUBRIAND ----- 1.380,00

(FILE MIGNON ALTO, MOLHO CHAMPIGNON, PALMITOS NA

MANTEIGA, PURE DE BATATAS, ERVILHAS E ARROZ BRANCO.)

CHATERUBRIAND: シャトーブリアンステーキ

FILE MIGNON ALTO: 厚ききれいなヒレ肉

MOLHO CHAMPIGNON: マッシュルームソース

PALMITOS NA MANTEIGA: バター味ココヤシ新芽

PURE DE BATATAS: マッシュポテト

ERVILHAS E ARROZ BRANCO: エンドウ豆&ご飯

PEIXE COM MOLHO DE CAMARAO ---- 1.200,00

(PIRARUCU A DORE COM MOLHO DE TOMATE E CAMARAOES,

ACOMPANHA ARROZ E PURE DE BATATAS.)

PEIXE COM MOLHO DE CAMARAO: エビソース掛魚

PIRARUCU A DORE: ピラルク(アマゾン川巨大魚)

COM MOLHO DE TOMATE E CAMARAOES: エビと

マトのソース掛

ACOMPANHA ARROZ E PURE DE BATATAS: ご飯と

マッシュポテトの添え物

CERVEJA CERPA EXPORT ----- 210,00

CERVEJA: 瓶ビール(CERPA: メーカー名)

AGUA MINERAL ----- 60,00

AGUA MINERAL: 水(炭酸入と炭酸無がある)

GERAEUCHERTER AUFSCHNITT 1.900,00

(FRIOS DEFUMADOS)

SALADA DE BATATA 1.300,00

頻繁なレート変動に備え、鉛筆書きの値段も

メニューには肉料理や魚料理等の区別や材料をどう調理しているかが書かれていたが、辞書を使っても???

何を食ったらよいか全くわからず勘で頼んだら、「これはやめたほうがいい」と変更されたこともあった。そこで、他の客が食べているのを見て、おいしそうに思えたものを頼み、気に入ったら料理名をメモした。

空港で航空券のことでトラブルが起きたり、ホテルで宿泊に必要なことの確認ができなかったりした場合、ポルトガル語であれこれ尋ねられた。しかし、私がポルトガル語を話せないことがわかった時は、いつも「Do you speak

English?」と尋ねられた。何度聞いても「Can you speak English?」ではなく、「Do you speak English?」だった。

英語の先生に聞いたら、「Do you speak English?」は「英語を話しますか?」と相手の意志を尋ねているが、「Can you speak English?」は「英語を話せますか?」と相手の能力を尋ねているとのことだった。

その言語を話すか話さないかは、本人の意志によるものなのだ。私は話せないコンプレックスを持っていたので、「Can you speak English?」が普通だと思い込んでいた。

語学力や文法の力が足りなくても、中学の英語で十分通用する。語彙が足りなければ、ジェスチャーでも伝わる。

アマゾンのホテルに宿泊した時、うち以外はイタリア人グループだけだった。私は、日本語 > 英語 > ポルトガル語 > イタリア語の語学力で、会話を挑みた。

「火山」が両方の国にあることを話題にしようとしたが単語がわからず、やっと出たのが「マウント・ドッカーン」なんとか通じ、少し笑顔が出た。

中学時代にレコードで覚えていた「Gigliola Cinquetti の La pioggia(雨)」をイタリア語で歌ったら喜んでくれ、さらに笑顔が出た。

子どもに折り紙を紹介させたら喜んでくれた。しかし、イタリアにも折り紙があることを教えてくれた。

自転車で南米大陸を旅している日本人と出会った。京都の中学校の先生だったが、夢を捨てきれず、仕事を辞めて自転車による世界一周の途中だった。「会話は?」と尋ねると、「私は絵が描けるので、これで会話できます。」「主に野宿での旅なので、途中で事故等に遭えば行方不明になってしまうかも。」と笑顔で語られた。大きなスケールを持ったとてもすごい人だった。

相手に自分の思いを伝えたいという意欲があれば、伝わるのだ。方法や手段も必要だが、大切なのは「伝えたい」という気持ちだ。

私たちは、日本語で自分の思いをきちんと伝えられる。自分に誇りを持って笑顔で生きていけば、人間関係のトラブルなんか簡単に乗り越えられるはずだ。

○ふるさとを語れるようになってほしい

写真の注文中で仲良くなった写真屋マルチノ氏は日本に対してとても関心があり、「日本語には、なぜ3種類の文字があるのか?」と英語で尋ねてきた。

私は考えたこともなかったけど、「日本人なのに、知らないのか?」と思われなくなかったので、「知らない」とは言えなかった。

絞り出すように、『漢字』は中国から伝わって日本に定着した文字、『ひらがな』は漢字から派生してできた文字、『カタカナ』は外来語を表記するために生み出された文字というような説明をしてしまった。自信はなかったし、かなり誤っていたようで、後で恥ずかしくなった。

自分がよくわかっていないことを、相手が納得するようにきちんと説明するのは、たいへんだった。さらに、乏しい英語力による説明も、たいへんだった。「知識もない」「語彙もない」のないないづくしで苦しかったけど、貴重な経験となった。

こんなことで彼とはとても親しくなり、家に招かれたり、奥さんが手工芸を教えてくれたり、家族同士で食事をしたりと、交流が深まった。さらには、ヘリコプターをチャーターして学校の航空写真まで撮ってくれた。



校舎、体育館、運動場の端にヤシの葉葺きの小屋、ジャングルジム、学校そばのジャングルの川にはワニがいる

高校時代、熊本 - 八代間の電車内で、同席した二人連れが八代付近の車窓の景色を見て話していた。

「この辺に見える植物は、何だろう？」

「細いから、きっとネギじゃないかな？」

二人の結論は、ネギになってしまった。

気になった私は、「あれは、イ草です。」とつい口を挟んでしまった。

すると、「イ草って何ですか？」と返ってきた。

後に引けなくなってしまい、「イ草というのは・・・」と、しどろもどろに説明する羽目になってしまった。

実は、私もイ草についてあまり詳しくなかったのだ。

旅人は旅先で質問者になるが、ふるさとでは説明役になる。尋ねるのは簡単だが、答えるのはけっこうたいへんだということを経験した出来事だった。

日本語を語るといことは、簡単にはいかない。だから、相手に対して答えやすい質問をすることが大切だ。また、自分のふるさとについては、誇りと自信を持って語れるようになりたい。

7 さらなる宿題「託された日本の魂というパトン」

「中野さん、もっと、経済しなきゃ。」諭すように呟いたドゥヴァル氏の言葉が、20 数年経った今でも離れない。

彼に最初に出会ったのは、リオ・デ・ジャネイロでの研修会に参加した帰りに先輩の先生に導かれるまま立ち寄ったブラジルにある彼の家だった。62 才の彼が差し出した名刺には、「日本語観光案内人」とぎこちない日本語が書かれていた。

彼は人なつっこそうな表情をしていたが、私は「先輩は、なぜ私を連れてきたのだろう。観光ガイドを紹介するためなのだろうか。」と少し戸惑いを感じた。

その後、彼は流暢な日本語で自分のことを語り始めた。ブラジルの南東部ミナスジェライス州で生まれ、小さい頃に親元を離れて日本からの移住者(熊本県人)の家で暮らし始めた。そのため、日本語の勉強をするとともに日本的な考え方を身につけていかなければならなくなった。

ところが、第二次世界大戦でブラジルは連合国側として参戦したので、日本とは敵対国となってしまった。このため、彼は日本語を使うことを禁じられた。終戦後、隣接する首都ブラジリアに移って独学で日本語の勉強を続け、日本語の会話だけでなく読み書きまでこなすようになり、ポルトガル語、日本語、英語での観光ガイドを始めたということだった。

彼の部屋の本棚には古びた日本の本や雑誌、新聞が大切に並べられており、机の上には手あかが付いてよれよれになったポルトガル語 日本語の辞書や漢和辞典が積み重ねられていた。

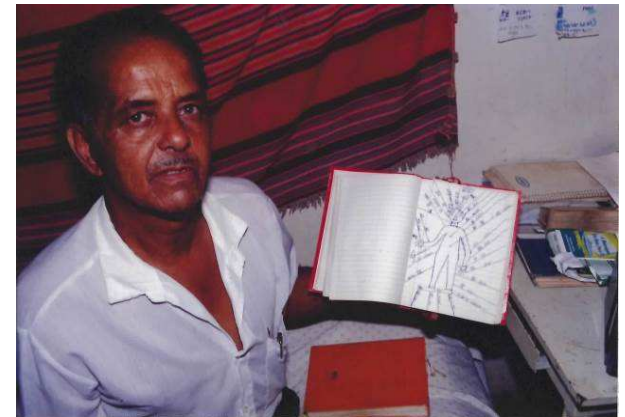
そして、毎晩使っているというノートには日本語の勉強の跡がぎっしりと残っていた。本や雑誌の一つ一つについてどうやって手に入れたのか、どのように使っているのか、彼は息つく暇もないくらい熱く語ってくれた。



少年キングやマガジンの雑誌新聞が教科書



ひたむきな日本語学習の跡



ノートを片手に熱く語るドゥヴァル氏

始めは日本語をうまく話すブラジル人だなあという印象だったが、熱い語りを聞いているうち、日本語習得に対する並々ならぬ情熱に引き込まれていった。先輩が彼を紹介してくれた理由が、なんとなくわかりかけてきた。

翌年は修学旅行先がブラジリアだったので、彼の生き方にふれさせたいと考え、ガイドを依頼した。案の定、子どもたちは一番の思い出に彼のことを挙げていた。

旅行中、興味深いことが起きた。私たちがブラジリアの日本語学校の生徒との交流用に持参した日本の国語の教科書を見て、彼が「私にも欲しい」と言ったのだった。日本語学習に対するひたむきな姿勢に改めて感動するとともに、もう少し配慮しておけばよかったと悔やんだ。

このような経験から、私は自分の家族をどうしてもドゥヴァル氏に会わせたい、会わせずにはおられないという衝動に駆られ、家族でブラジリアを訪れた。

もちろん、日本語の本を数冊持参したのは言うまでもない。熊本県民の私たちにとって、ラテンの陽気な気質の中に時々熊本弁が飛び出してくる彼はとても親しみやすく、子どもたちもすぐ仲よくなった。



大歓迎してくれた彼の家族

半年ほど経って、「ドゥヴァルさんに、また会いたい。」と子どもから強くせがまれ、再びブラジリアを訪れた。

2回とも彼の家を訪問して、家族ぐるみで楽しい時間を過ごした。彼の家族は日本語が話せなかったが、身振り手振りでのコミュニケーションもまた楽しいものだった。質素な生活の中で心のこもった温かいもてなしを受け、観光では味わえない至福のひとつを過ごすことができた。



Pedra chapéu de sol (太陽の帽子の岩)

前述したが、彼の日本語の勉強は独学だった。自分で辞書を引き、言葉の意味を調べ、新しい文字を覚えていく。出会った日本人観光客が、貴重な日本語の先生なのだ。仕事イコール勉強だった。

漢字の部首の話や熟語の話になると、目の輝き方が変わってくる。「この前の旅行客から、こんな言葉を教えてもらったよ。」とうれしそうに語ってくれた。彼の日本語学習の姿勢には、学ぶべきものがたくさんあった。出会えてほんとうによかったと思った。

しかし、この時の私はまだ彼の表面しか見ていなかった。私には、日本語を教えてあげるといようなおごりもあったように思う。

そのことに気づかせてくれたのは、私たちがホテルに送ってくれた時に彼が発した言葉だった。私たちが泊まっているホテルを見て、彼はとても真剣な表情で言ったのだ。

「中野さん、このホテルに泊まって高い金を払っているけど、それは豪華さにお金を払っているみたいだ。もっと、経済しなきゃいけないよ。」

親から、戒められたような気がした。快適さや安全性等のため旅行社から勧められたホテルではあったが、彼の言葉には説得力があり、実直さが強く胸に突き刺さってきた。

私が彼の言葉を素直に聞くことができたのは、日本語と

して意味が通じる言葉だったからだけではない。彼の口から、ふるさと日本が飛び出してきたように感じたからだ。今では忘れかけられている日本の魂を、彼が大事に受け継いでいてくれたのだ。まるで、タイムマシンでさかのぼって日本人の先祖に出会ったような、懐かしささえ感じた。日本人より、日本人らしいと思った。

もはや、彼は私にとって日本語が話せるガイドではなく、日本の心を教えてくれるかけがえのない先生となっていた。私たちが彼に日本語を教えるのではなく、彼が日本人としての生き方を教えてくれるのだ。先輩の先生が彼に引き合わせてくれた目的は、きっとここにあったに違いないと思った。流暢な日本語だけでなく日本的な考え方を身につけていたドゥヴァル氏は、「日本人としての誇りを持って生きよう」と発芽力のある種を私の心に蒔いてくれた。

日本からブラジルへの移民は、一世紀も前に始まった。「信頼できる民族」と評価されてきた日本人の生き方がこのように引き継がれてきたこと、そして日本の魂というパトーンがこのような形で私に託されたことは実に感慨深いことであり、今、自分の役割の重みを改めて感じている。